

# “厳しい練習を通じ 人間を育てる”

野球王国和歌山の二時代を築いた名將の言葉には、人を活かす力が満ちていた。

**仁坂知事(以下仁坂)** ●高嶋さんは甲子園での通算勝利68勝と歴代最多の記録を残された名將として有名ですが、2018年に監督を勇退されました。ご出身は長崎県五島列島だそうで、学生時代から野球をしてきたとのことですが、当時のお話や思い出などを教えていただけますか。

**高嶋仁(以下高嶋)** ●野球を始めたのは中学生になってからで、3年生の時に県大会で優勝し、次は高校球児として甲子園へ”と思い、長崎の海星高校へ進学し野球を続けました。練習は厳しく百何十人が入部して、最終的に残ったのはたったの11人でした。

**仁坂** ●その海星高校時代に甲子園に出場し、そこで味わった感動がその後の監督という未来に繋がっていったのだと聞いています。

**高嶋** ●そうです。中学校ではピッチャーでしたが高校では肩を壊し、外野手として頑張り2年生の時に初めて甲子園に出

場しました。そしてあの大きな”甲子園球場”で、何万人という観衆に見守られ入場行進を経験した時は、感動で足がガタガタ震えました。このとき”指導者として甲子園に戻って来よう”と心に決めました。そして教員の資格を取るために大学に進学しようとしたのですが、父は進学にあまり賛成ではありませんでした。

しかしそんな父を説得するために、母も働きに出るなどの協力をしてくれ、私自身も一年間アルバイトをしてお金を貯め、日本体育大学に進みました。

優勝に必要なのは  
“実力と運と勢い”

**仁坂** ●その後、奈良県の智辯学園で監督となり、1977年の第49回センバツではベスト4の成績を残され、1980年には智辯和歌山の監督に就任されましたね。

## 知事対談 高嶋 仁 × 仁坂吉伸

智辯学園和歌山高等学校名誉監督 和歌山県知事  
環太平洋大学体育学部特任教授

校長室に掲げられている和歌山県大会優勝旗の前で行われた対談。中央で金色に輝くのは第100回全国高等学校野球選手権記念大会和歌山大会の優勝旗。



**高嶋** ●その当時のチームは、キャッチボールすらまともにできませんでした(笑)。さらに和歌山県には箕島高校をはじめ、多くの強豪校がひしめいている時代でした。

**仁坂** ●そうですね。その頃は箕島高校が公立高校で初の春夏連覇(1979年)を達成するなどの全盛期で、和歌山県は野球王国として全国にその名を轟かせていました。

**高嶋** ●しかし彼らに勝たないと甲子園に出場できない訳ですから、これは20年かかるだろうなと思いましたが。実際にそれぐらいの差がありました。監督に就任して5年目の1985年のセンバツに何とか初出場を果たしました。

**仁坂** ●そして1994年に念願のセンバツ初優勝に至った訳ですが、思い出深い試合などがありましたら教えてください。

**高嶋** ●やはりその初優勝した大会中の宇和島東高校との準々決勝ですね。8回まで4点差で負けていたのを逆転するも、9回裏で振り出しに戻され、さらに延長戦で競り勝った試合です。それでチーム自体に勢いがつき、準決勝でPL学園を、決勝で常総学院を破り優勝しました。高校生って勢いに乗るともう止められないですね。そこで”そうか。こういうゲームをする”と優勝できるんや”という”優勝への道筋”を覚えてもらったような感じがしました。

**仁坂** ●なるほど。では勝ち続けるために具体的には何が必要なのでしょう？

**高嶋** ●優勝するには、”実力・運・勢い”という3つの要素が必要だと思います。一つ目は当たり前ですが実力。次は運ですね。やっぱり一回戦の抽選で対戦相手に優勝候補を引いたりすると勝てないこともあります。口ではキャプテンに”一番強い学校を引いてこい”とは言いませんが本心は別です(笑)。そして最後はやはり勢いですね。逆転やサヨナラゲームを体験すると、そのまま突っ走ってしまうことが多いです。



智辯和歌山のグラウンド横に建つ”優勝記念碑”。1997年、第79回全国高等学校野球選手権大会で優勝した瞬間。メンバーがマウンドに集まる様子が彫られている。中央に描かれているキャッチャーは、当時主将を務めた中谷 仁(なかににじん)現監督だという。



**仁坂**●和歌山県には高野連の加盟校が39校ありますが、そのうち21校が甲子園に出場しています。そういうこともあり和歌山県では高校野球への関心が高いですね。その上県予選も1回戦から全試合を生中継していて、みんながテレビで応援しているんですよ。そんな「野球王国和歌山」ですがその歴史を振り返ると、和

歌山県は夏の甲子園が始まった頃から活躍しています。例えば和歌山中学校(現桐蔭)は第1回から14回連続出場しています。また1933年のセンバツでは、和歌山中学校・海草中学校(現向陽)・和歌山商業(現和商)・海南中学校(現海南)の4校がそろって出場しています。他にも全5試合完封・2試合連続ノーヒットノーランの記録を打ち立てた海草中学校の嶋清一選手は「伝説の大投手」として知られています。阪急や近鉄の監督として活躍された西本幸雄さんも和歌山中学校出身で、私の父の学友でした(笑)。また今年の春に和歌山市立和歌山高校と、高嶋さんの後を継いだ中谷監督率いる智辯和歌山の2校が甲子園に出場したのは嬉しかったですね。私は見るのも好きで予定がなければすぐに甲子園へ飛んでいく

**高嶋 仁(たかしまひとし)**

1946年長崎県生まれ。1972年から智辯学園、1980年から智辯和歌山監督。甲子園で春1回、夏2回優勝。甲子園通算68勝は歴代最多。2018年に勇退し、現在は智辯和歌山名誉監督。2019年、環太平洋大学体育学部特任教授に就任。



誇らしげに図書館に展示されている甲子園での優勝盾。

**仁坂**●やはり指導者の役割は大きく、そういう「教える技術」も重要なんですね。そこで選手に対する優れた教育や指導、育成に尽力された高嶋さんには、2006年に和歌山県から「スポーツ栄誉賞」を贈らせていただきました。

歌山県は夏の甲子園が始まった頃から活躍しています。例えば和歌山中学校(現桐蔭)は第1回から14回連続出場しています。また1933年のセンバツでは、和歌山中学校・海草中学校(現向陽)・和歌山商業(現和商)・海南中学校(現海南)の4校がそろって出場しています。他にも全5試合完封・2試合連続ノーヒットノーランの記録を打ち立てた海草中学校の嶋清一選手は「伝説の大投手」として知られています。阪急や近鉄の監督として活躍された西本幸雄さんも和歌山中学校出身で、私の父の学友でした(笑)。また今年の春に和歌山市立和歌山高校と、高嶋さんの後を継いだ中谷監督率いる智辯和歌山の2校が甲子園に出場したのは嬉しかったですね。私は見るのも好きで予定がなければすぐに甲子園へ飛んでいく



**強いチーム作りと人間を育てるとは？**

**仁坂**●では実力を伴った強いチームを作るためには何が大切なのでしょう？

**高嶋**●強いチームを作るために大切なのは「体力・精神力・技術」の3つだと思っています。まず最初に体力づくり。これは中途半端ではなく、どこも真似できないような日本一の練習をしました。時には生徒たちに反発されることもありましたが、それを克服することで自信が生まれ精神力が鍛えられます。ひとつだけが良ければいいのではなく、3つの要素が揃って初めて本当に強いチームになります。

**高嶋**●高校球児ですから目標はもちろん甲子園なんですが、目的はやはり「人間を育てる」ということです。

**仁坂**●指導の中で「人間を育てるとは？」  
**高嶋**●社会人になっても通用するような常識やマナー、気構えなどを練習の中で教えていました。例えば、引つ張ってホームランを打つても叱るんです。そんなホームランを打つのは楽なんです。でも逆方向へ流して打つのは難しい。しかし選手としても人としても鍛えるために「楽をするんじゃない」という意味も込めてあえて叱るんです。逆に試合でエラーをして帰ってきて、頭ごなしに叱るのではなく「お前のエラーで2点取られた？ だったらラン打つたら終わりやな」と発破をかければ、「ヨシ！ やるぞ」と燃えるんですね。今は厳しい指導が難

**知事対談**  
**高嶋 仁 × 仁坂吉伸**

智辯学園和歌山高等学校名誉監督 和歌山県知事  
環太平洋大学体育学部特任教授



試合を目前に練習にも熱が入る中谷監督と生徒たち。近くで見るとその熱量と迫りに圧倒される。

しい時代ですが、人間が人間を動かすのはやっぱり言葉ですから、これからの指導者は言葉の勉強も重要ですね。また自身が偉そうにせず、謙虚さを持って選手と接すれば問題は出てこないと思います。

**仁坂**●高嶋さんはご自身が動くことが多く、グラウンド整備にしても高嶋さんが率先してなさっていたと聞きます。厳しく鍛えつつも人間的にもきちんと接し、生徒を大事にしていたのがよくわかります。とはいえ練習を拝見すると、ノックがまた厳しい…。

**高嶋**●監督と選手との対話はノックですからね(笑)。しかし他校のような「200本ノック」とかはありません。右側15本、左側15本の合計30本だけ。しかし一生懸命飛びつければ捕れる。少しでも気を抜くと捕れない「ギリギリの所に打ちます。だから選手は真剣に練習に向かい、少しずつ守備範囲が広がっていきます」。

んですが、そこまで人を惹きつける野球の魅力って何なのでしょう？

**高嶋**●それは見ている全員が監督になれることではないでしょうか。攻守の交代や1球1球に間がある、それがワクワクするんですよ。「ここはスクイズやろ」「やっぱり打たすべき」。ヒットが出なかつたら「ほら！ やっぱりスクイズだったやろ」って(笑)。そういうのが楽しいんですよね。

**仁坂**●なるほど。私は楽しむだけなので偉そうなことは言えませんが、「チームスポーツ」では、仲間と協力することの楽しさと重要性を感じることができ、また「チームワーク」組織で働くことの素晴らしさも学ぶことができます。

**高嶋**●試合は誰のためにするのか？ 親のため、自分のため、学校のためといういろいろあると思いますが、僕は「補欠のために試合しろ」と言っんです。補欠がいなければ練習もできません。仲間や同僚のために頑張る。それがチームワークの重要な部分だと思っています。

**仁坂**●そういう意味でも若い頃に野球をはじめスポーツをすることはすごく良いことですね。もちろんスポーツマンシップや克己心も身に付けることができ、そうした人は社会に出ても実に良い仕事をされると思います。今日はスポーツの素晴らしさと重要性を再認識させていただきました。ありがとうございました。